研修報告書

・研修テーマ
循環型経済、林福連携などの取り組みの実態調査
・訪問先
社会福祉法人長野コロニー・社会福祉法人花工房福祉会
・訪問日時
令和6年8月29～30日
・参加人数

研修テーマは、循環型経済や林福連携など、SDGs時代に合った取り組みの実態調査である。今回は、就労継続支援A型事業所である長野福祉工場・若槻工場（社会福祉法人ながのコロニー）と、社会福祉法人花工房を見学させていただいた。

研修内容としては、施設見学のほか、社会福祉法人ながのコロニーにてJRAファシリティーズ株式会社と製品づくりを始めた経緯、会社の理念、仕事の現状、そして若槻施設ならではの特徴について話を伺い、インタビューも行った。社会福祉法人花工房では、林福連携の実態や地域住民との協働についての話を聞き、実際に働いている様子を見学した。

社会福祉法人ながのコロニー

まず、代表の小室さんからお話を伺った。ながのコロニーが縫製業を取り入れた背景には、高齢化と人手不足がある。縫製業は多くが個人経営であり、高齢化に伴い事業を閉じる人が増えている。また、縫製業は肉体的に重労働であるため、若い人が希望しないという現実もある。こうした背景から、ながのコロニーではゼッケンの製作を手掛けるようになった。

ワークサポート篠ノ井では、就労継続支援B型の利用者が中心となって働いている。私たちは、実際にゼッケンがどのように製作されているのか、その現場を見学した。まず、フェルトの裁断に使用されるプレス機について説明を受けた。テーブルの長さを裁断するフェルトの長さに合わせて調整しているため、利用者がわざわざ寸法を測って切る手間が省け、裁断ミスも防止されている。この工夫により、作業効率が上がるだけでなく、利用者にとっても負担が軽減されていることがわかった。ゼッケンの番号貼り付け作業はミリ単位で行われ、3ミリ以上のズレがあると使用できないほどの精度が求められる。実際に利用者が作業する現場を見学した際、特定の利用者にしかできない高度な技術が必要な工程があり、長年の経験で培われたス

キルだと感じた。ながのコロニーは中央競馬場を中心にゼッケンを製作しており、年間5万枚、地方競馬場向けにも2.5万枚を製作している。背景には、一度も納期遅れがないという信頼があると考えられる。利用者は、基本的に9時30分から16時まで作業を行っており、1日300～400枚のゼッケン作成を目標としている。利用者の身体的特性や体調に合わせて、適切な作業が提供されており、無理なく働ける環境が整えられている。また、集中力を必要とする作業が多いため、利用者が作業に集中できる環境作りにも細心の配慮がされている。

若槻工場では、就労継続支援A型の利用者が主に働いており、チラシ、教科書、のぼり旗などの印刷を手掛けている。編集デザインから印刷・製本まで一貫して行っており、細かい要望にも対応できる。のぼり旗の作成では、昇華転写技術を使用して色合いを正確に再現し、薄い生地を用いることで裏側からもデザインが見える高い宣伝効果を実現している。これらの技術は、長年のノウハウと経験によるものだと感じた。

最後に利用者へのインタビューを行い、一般企業でも障がい者雇用がある中で、ながのコロニーで働き続けている理由を尋ねると、「やりがいと環境です」との答えが返ってきた。一般企業では責任ある仕事を任されることが少ないが、ながのコロニーでは自身の能力に合った仕事をやらせてもらえる点が大きな違いだという。また、一般企業では相談相手がいない孤独感や不安があったが、ながのコロニーでは常に相談できる相手がいるため、安心して仕事に集中できると話していた。このインタビューを通して、ながのコロニーが利用者にとって非常に働きやすい環境を提供していることが強く伝わってきた。障がい者雇用における孤独感や不安感を和らげる環境が、ながのコロニーの大きな強みだと感じた。

就労支援事業所を廃止し、障がい者が一般企業で働く環境を整えるという動きが世界的に進んでいるが、それについての質問に対して、「現在、就労継続支援A型にいる人が100%一般企業で働けるわけではない。障がいの度合いによっては、就労継続支援B型の利用者が一般企業に雇用されるかどうかも不透明である」との意見があった。また、「やりがいを持って働くことは、生きがいにつながる」とも述べていた。この意見を聞いた時、以前ながのコロニーの方から、利用者の多くが自分の趣味や欲しいもののために毎日仕事を頑張っていると伺ったことを思い出し、障がい者がのびのびと働ける環境を無くす方針はやめるべきだと強く感じた。

社会福祉法人花工房

花工房には、パングループ、フライルグループ、はやぶさグループがある。パングループでは、パンやスイーツの製造を行っており、最も主力の事業である。フライルグループでは、フラワーギフトや切り花セット用の花を育成している。はやぶさグループでは、受託作業を中心に活動しており、パソコンの解体やパーキングエリアでの植栽販売、公園での草取り、ハーブガーデンでのハーブ苗の植え付けなど、農業分野において企業や農家と連携し、施設外就労を行っている。

実際にハーブガーデンを見学し、利用者と共に苗植えを体験した。作業効率を上げるにはコツが必要で、利用者の作業の速さに驚かされた。作業中の雰囲気も良く、利用者は楽しそうに会話をしながら作業を行っていた。

また、花工房では「大豆まるごと製法」により、大豆の粉をまるごと使ったおからが出ない100%大豆の豆腐を製造している。地元の農家と連携し、長野県の西山大豆を使用し、地産地消を心掛けている。

醤油作りのきっかけは、遊休農地の利用を考えていた際、マルヰ醤油株式会社から「大豆を作るのであれば買い取る」という提案を受けたことにある。これを契機に、大豆の生産を開始した。ただ大豆を生産するだけでなく、地域の小学生と共に豆まきを行い、食育と障がい者理解の促進も兼ねている。毎年、収穫した大豆で作った醤油を参加した小学生にプレゼントしている。

「炭房ゆるくら」では、薪や炭事業を展開している。原材料は、所有者や林業事業者からの持ち込みや施設職員による伐採で確保している。利用者はトラックへの積み込みや薪割りを行い、販売まで担当している。農業の担い手の減少や高齢化により、山の手入れが行われていないケースが多い。そこで障がい者が林業に携わることにより、地産地消が促進され、人手不足の解消にもつながる「農福連携」が実現できると感じた。施設側にとっても、屋外作業を提供することで利用者のストレス解消につながり、新しい作業の場を提供できる。

今回の研修を通じて、障がい者が社会で活躍するための多様な支援の在り方や、地域と共生する持続可能な取り組みの重要性を再認識した。ながのコロニーや花工房のような施設が、地域に根差した活動を続けることで、障がい者が自立し、社会に貢献できる環境を作り出していることが非常に印象的だった。インタビューを通して2つの施設に共通して言えることは、介護士、施設職員の人手不足が課題であった。